

兵庫協会

神戸・三宮周辺地区の新たなまちづくり

—2012年から都心の未来の[将来ビジョン]づくりに着手—

国際的な都市間競争が激化し、高齢化・少子化に伴う人口減少社会を迎える中、神戸市は、人のにぎわいを創出し、持続發展的なまちづくりを進める方針を打ち出し、2012年から神戸市の都心像を模索する取組みを本格的にスタートさせた。

同年12月から「都心の良いところ、良くないところ、未来の姿」について意見募集を始め、神戸市の未来像を考える組織として翌2013年3月に神戸の都心の『未来の姿』検討委員会（以下、『未来の姿』検討委員会）を設置した。メンバーは、神戸エリアで組織された各種まちづくり協議会など14団体が地元組織代表として参画。さらに、市民代表として神戸市自治会連絡協議会と神戸市婦人団体協議会のほか、鉄道やバスなどの交通事業者、神戸商工会議所や神戸経済同友会などの経済団体、都市計画・交通計画・エネルギー・防災など各専門分野に精通した学識経験者も加わり、『未来の姿』検討委員会は2013年3月の第1回会合を皮切りに検討を重ねていった。

併せて、「神戸の未来のまちづくり市民300人会議」や「対話フォーラム（市長と描こう 都心未来）」、「都心の未来を考えるシンポジウム」などを開催し、多くの市民からの意見や声を吸い上げる努力を展開していった。

—3つの柱と都心に備える8つの軸—

こうした取組みの結果、神戸市は2015年9月、今後の目指すべき神戸の都心像を示した、神戸の都心の未来の姿[将来ビジョン]（以下、『将来ビジョン』）と神戸の玄関口である三宮周辺地区の『再整備基本構想』（以下、『再整備基本構想』）を策定・発表した。

『将来ビジョン』では、都心の将来像を表現する3つの柱として、①心地良いデザイン、②出会い、イノベーション、そして文化、③しなやかで強いインフラを打ち出した。そして、都心に備える軸として「景観」、「にぎわい」、「生活・居住」、「産業」、「観光・文化」、「防災」、「環境・エネルギー」、「交通」—8つの軸を掲げた。瀬戸内の穏やかな気候で、海と山を身近に感じ、古くから港町として発展してきた国際色豊かで多様な文化が育まれたまちという神戸のイメージをより一層深掘りするとともに、新たな発想も取り入れ、50年後、100年後にも魅力的なまちで

あり続けることを目指している。

神戸市では、『将来ビジョン』および三宮周辺地区の『再整備基本構想』で発表したまちづくりの方針を具体化し、行政や民間事業者が行う際に、その設計の基本となるマスタープランを委託する募集を開始している。

—神戸の玄関口として三宮周辺エリアを再整備へ—

『将来ビジョン』とともに策定された三宮周辺地区の『再整備基本構想』は、神戸の玄関口となる三宮エリアについて、神戸の象徴となる三宮駅の新しい駅前空間「えき〜まち空間」を整備し、海と空の玄関口である神戸港と神戸空港、広域交通拠点である新神戸駅への交通結節機能を高め、元町エリア・旧居留地エリア・ウォーターフロント・北野エリアなど地域全体の魅力を向上させていこうというもの。

三宮エリアは、三宮交差点を中心に、JRや阪急線、阪神線、地下鉄西神・山手線、地下鉄海岸線、ポートライナーの6駅が点在するものの、「乗り換え動線が分かりづらい」「駅からまちへのつながりが悪い」「バス乗り場が分散して駅前広場の交通結節機能が弱い」などの課題が指摘されていた。

『再整備基本構想』では、6つの駅を1つの駅と捉え、人と公共交通優先の道路空間「三宮クロススクエア」を段階的に整備。周辺開発に合わせ、ポイド（わかりやすい縦動線プラス滞留空間）を整備することにより、駅周辺の「3層ネットワーク」として地下・デッキレベルの歩行者ネットワークと地上との接続動線を充実させていく。また、分散している中・長距離バス乗り場を集約し、新たなバスターミナルを整備する計画だ。

こうした動きに連動し、阪神・淡路大震災以降暫定的な建物として営業していた神戸阪急ビル東館の建替えが今春、阪急電鉄



旧居留地のまちなみ



旧居留地連絡協議会のパンフレット



JR三ノ宮駅

（株）から発表された。2021年の竣工を目指し、オフィスと商業施設、ホテル、駅施設からなる地上29階建ての超高層ビルの開発が進む。



『未来の姿』検討委員会に、旧居留地連絡協議会常任委員長として参加した兵庫ビルディング協会会員の明海興産（株）専務取締役の富岡良典氏に三宮周辺地区のまちづくりの現状と

旧居留地のまちづくりに対する思いを聞いた。

旧居留地のまちづくりに100社強が参加

—旧居留地の特徴を教えてください。

富岡氏 旧居留地の歴史は古く、来年1月に150周年を迎える神戸港の開港に合わせ、欧米人の居住地として、英国人土木技師J.W.ハートの設計のもと、整備された。当時の西欧近代都市計画思想をベースに、格子状街路や遊歩道、公園、街燈などとともに、126の整然と区画された敷地が配された。今でも街路の配置や標準1,000㎡の敷地割はほとんど変わっていない。歴史的な風格のあるまちなみが特徴的で、現在は神戸の中核業務地となっている。

—旧居留地連絡協議会の概要と活動について。

富岡氏 旧居留地は業務地なので、居住者による自治会的な組織はなく、地区内の企業がコミュニケーションを図る機会が少なかった。そうした中で1983年に旧居留地エリアが神戸市都市景観条例に基づく景観形成地域に指定されたことが契機となって、まちづくりという観点から「旧居留地連絡協議会」としての活動を始めた。協議会にはビルオーナーをはじめとする地権者だけでなく、テナントも参加し、100社強の組織となっている。現在、常任委員会の下に、都心（まち）づくり委員会、環境委員会、防犯・防災委員会、親睦・イベント委員会、広報委員会の5委員会を設置して活動している。

落ち着いたある、人にやさしいまちづくり

—旧居留地連絡協議会の代表として参加された『未来の姿』検討委員会の様子を教えてください。

富岡氏 阪神・淡路大震災で神戸のまちは壊滅的な被害を受けた。旧居留地でも地区内の建物約100棟のうち、20棟もの建物が大きな被害を受けた。また、港の機能も失われ、港を中心とした産業の衰退とともにまちの活力に影響していった。震災から20年が経過し、復興に向けて着実に歩み始めた機会を捉え、都

心の将来像、未来の姿を検討することになった。検討にあたり、地域の実情を最も把握している立場として地元組織の参画が求められ、旧居留地連絡協議会もその一員として参加した。

—昨年3月から昨年6月まで計5回の会合を通じ、神戸のまちの良いところと良くないところの抽出、戦略的に都心の再生を進めるための誇るべき神戸らしさとは何か、ということなどを議論していった。

—旧居留地連絡協議会としてのまちづくりの基本的なスタンスは。

富岡氏 旧居留地の周辺には、隣接する南京町に中華風のにぎわいのあるまちなみがあり、ウォーターフロントには港町の開放感溢れる空間が拡がり、三宮には神戸の玄関口としての人の流れと繁華街がある。これら地域特性をさらに際立たせることができるかどうか将来の神戸のまちは左右するのだろう。

協議会としては、風格のある、落ち着いたまちなみを大切にしつつ、人にやさしいまちづくりを進めていきたい。近年、建物低層部にブランドショップが進出するなど、商業・観光の要素が強まりつつあるのは事実だが、変わらない旧居留地の要素として「働く場」であることが挙げられる。古き良きまちなみを大切にしつつ、神戸を支えるオフィス機能、働く場として企業コミュニティーを軸とした協議会活動を進めていく。

まちづくりや広告物のガイドライン策定

—協議会の具体的な取組みを教えてください。

富岡氏 1995年1月17日の阪神・淡路大震災からの復興にあたり、「復興計画」やまちなみ形成の基本方向を示した「都心（まち）づくりガイドライン」、広告物設置にあたっての基本的な姿勢を明示した「広告物ガイドライン」などを策定した。例えば、新しい建築物を建てる場合、施主は協議会と協議し、建築確認申請の際に協議した結果を報告することになっている。都心（まち）づくりガイドラインなどには強制力はないものの、協力を得ながら旧居留地の街並みを継承してきている。

また、企業コミュニティーを深めるため、親睦・イベント委員会を中心となってプロムナードコンサートや納涼大会、バーベキュー大会などを開催している。協議会の委員会活動が活発であるということは、委員会に参加している企業間の交流が活性化することにもなる。

—協議会に携わってどのくらいですか。

富岡氏 2005年からなので10年を超えている。それまではグループの海運会社の船に航海士として乗船していた。世界中の港に立ち寄ってきたが、神戸ほど美しい港はない。山の緑を背景にしたきれいなまちなみへ入港するようなイメージだ。この美しい風景をいつまでも継承していきたいと考えている。